

津軽地方の女子教育を考える その1

A STUDY OF WOMAN'S EDUCATION IN TSUGARU AREA No.1

坪 田 庸 子

N. Tsubota

目 次

はじめに

I. 津軽地方の教育の息吹きをたずねて

1. 藩政期の教育は
2. 幕末から学制までの教育

II. 学制発布後の津軽地方の教育

1. 東奥義塾
2. 菊池幾久子
3. 公立小学校の女子教育
4. 高谷徳子

III. 学制発布後の都会の教育

1. 津田梅子
2. 高杉幸子

IV. 津軽地方の女子のための高等教育機関

1. 弘前女学校 —以下次号—
2. 県立高等女学校

V. 大正時代

VI. 昭和初期

VII. 戦後

おわりに

はじめに

1986年4月、男女雇用機会均等法が施行されたことによって、募集や、福利厚生、定年制などを中心に女子の待遇は少しずつ、改善が見られるが、配置や昇進などの面では依然企業側の対応が遅れているということが労働省が発表した女子労働者の雇用管理調査の結果分かった。①女性の地位が飛躍的あるいは活気的な転換が与えられたのは1945年8月15日の終戦であるといわれており、男女平等の人権を得ることができた。そして1975年の国際婦人年をきっかけに女性の地位はどんどん高まりつつあり、あらゆる人たちが女性、女性と論ずるようになってきているが、にもかかわらず、女性に対する差別・偏見が現前としている。私たちの身近においてさえも見うけられる。そういう現状の中で私たち女性はより人間として、一人の人格をもつものとして認められるように努力しているのである。

1985年10月23日～24日まで東京の有楽町の朝日ホールで『国際シンポジウム——女は世界をどう変えるか』が行われた。このテーマを英語でいうと「変っていく世界における女性」となっており、変革の中で女が翻弄されるというニュアンスをもっているという参加者の一人は知っている。②まさに現代の急速に発展していく社会の中で私たち女性は右往左往しているだけなのだろうか。シンポジウムでは、第一議題「女性の地位」、第二議題「差別の構造」、第三議題「女性原理と男性原理」、第四議題「家庭と子ども」、第五議題「21世紀への戦略」であった。そして今年、女性学研究会によって全4巻の『講座 女性学』が出版され、その中の第三巻のテーマは「女は世界を変える」となっている。書店には女性、女に関する本が溢れ、気をつけてみると、週刊誌にも新聞も女性に関する記事で埋もれている。東京には女性の書いた本（小説や詩、実用書を除く女性著作全般）1500点（4,500冊）だけをおいている書店③ができたという。それなのに私は女性である自分のことはほとんど何も理解していないことに気づいた。女性であるから女性のことは全部知っているのは当然と思われるが、女性は女性らしく生きることによって自分の道を歩む、その女性らしさとは女性の本質とは、フェミニズム、女性学という言葉の氾濫の中で、自分を理解するためには、いったい何が必要なのだろうか。教育であろうか。

私たちは「いつ、どこで、誰が、何をした」というふうな話し合いから脱脚して、「人間とは何か」を考えなければならぬ。私たち女性は親から教師から“女の子らしさ”の役割を期待されている。はたして女らしさを保持することによって私たちは男性と対等に生きることができるのだろうか。

教職は一般に数少ない男女同一労働同一賃金を建て前としている職業であるにもかかわらず、キャリアを積んだ男性は管理職や教科主任になり、女性は低学年の担任といった校務分掌が固定化する傾向がある。現に市内の小中高でも見うけられる状況である。また高等教育の教員に関しては、女性の比率は学内の地位が高くなるにつれて下がること、学問領域や大学のタイプによって偏りがあることが明らかにされている。④又、研究業績水準

が男女同じ場合、明らかに女性の方が地位が低いということ⑤が指摘されている。同一賃金であるはずの教職がこのような状況である今、さらに男女差別がないといわれている国家公務員にも昇任、昇格の差別があるとして行政措置を要求しているニュースが朝日新聞に掲載されている。⑥ 私たちは女性そのものについて再検討する時期にきているのではないだろうか。女性たちが何を考え、何を欲するのか、女性の身体や心理や社会的態度に男性と異なる点が見うけられるとすればそれは何か。どうしてそれが起きたのか。私たち女性に甘えはないだろうか。女性が期待される社会的役割とは何か。21世紀を目前にして私たち女性を考えなければならないこと、しなければならないことが山積しているように思うのである。

そのためにも私は今、もう一度、19世紀の後半から20世紀初頭に活躍した女性に目を向け、女性はいったい何を求めてきたのか。女性にとって教育とは何であったかを考えてみたいと思うのである。まず第一に津軽地方の藩政末期頃からの女子教育は？ 第二に明治初期から中期の特に都会と地方での女子教育の違いをそこに育った女性の生涯を見ながら、考えて見たいと思う。それらの女性たちを通して、自分自身が受けてきた教育とどのような違いがあるのかを見て行きたいと思う。そしてさらには、女性として生きていくためには何をしなければならぬのか、何が必要なのかを考えたいと思うのである。

1. 津軽地方の教育の息吹きをたずねて

東京と弘前、今ではジェット機で、新幹線で、直通バスであるいは自家用車で、日帰りのできる距離となったが、私は今、タイムトンネルを通過して藩政時代から明治時代へとその時代の教育の様子を垣間見ようと思う。

1. 藩政期の教育は

1628(寛永5)年、「高岡」から「弘前」と改称された津軽地方の要である弘前は、二代目藩主信校によって1611(慶長16)年に開かれたのである。⑦ そのころから陸上においても、河流においても、交通の便に恵まれ、立地条件のすぐれた弘前は津軽地方の政治・経済・文化の中心であった。すでに京都、大阪、江戸との往来があり、これらの文化にも接していたので、建築、彫刻、あるいは詩歌を嗜み、学問(儒学)を研究する藩士も少なくなかった。

藩祖為信(1550—1607)は躬方諸礼師範として長谷川美濃等を召抱えて藩士の礼儀を正し、為信自身は歌道にも秀れていた。

四代目藩主信政(1646—1710)は特に山鹿素行について兵学・儒学を修め、率先して学問に励み、津軽平野西北部の新田開発をはじめとして、貞享検地、西海岸屏風山の植林など行政面の諸制度の整備、さらには、1661(寛文6)年には日記方を置いて、『藩日記』に記録させるなど藩の体制を整えることに尽力している。例えば諸制度の中には「百石の武士の長男や二百石以上の者の子弟は、11才より弓馬や礼法、読み書きに習塾するようにし、16才以上は学問と武芸の稽古を休みなく積むように、父兄がよく子弟の教育に心を配らなければならない。⑧」と規定している。

信政に続いた代々の藩主は、しばしばおそった凶作と、それにとまなう社会不安や藩財政難の中にあっても、国学・儒学のほか医学その他実学を重んじ、藩士の教育を怠ることがなかったのであるが、その教育も上級藩士や家臣を対象するところにとどまり、さらに北辺警備⑨ということからも藩では旧来の武芸だけではとうてい間に合わない情勢に追い込まれていて、藩士たちの能力の向上のために組織的な教育施設としての藩校が必要となってきたのである。

九代目藩主寧親(1765—1832)は、名君とうたわれた八代目藩主信明の末期養子として1791(寛政3)年7月5日藩主となった。寧親は黒石藩の六代目藩主だった人で、幕臣成島勝雄父子に歌を学び、また俳諧を好み、俳号を三つも持つほどの人だった。この寧親の代にいよいよ藩校の創設にとりかかることになる。1794(寛政6)年用地を追手門前(現在の東奥義塾の校地)に決め、そこにあった士族藩士の屋敷は他に移して、学舎の建築をはじめ、教授陣容の整理や諸規則の規定を急いだ。⑩ この藩校の収容能力は300名程度となっていたが、藩校といっても最初から藩士の子弟一般に解放されたのではなく、一部の藩の上級子弟にかぎられ、藩の幹部家臣の養成機関となっていたのである。そのために藩校に入れなかった若い藩士たちの向学心は増長され私塾や寺小屋に通うものが増えたのである。

私塾や寺小屋は藩校が1796(寛政8年)に城外に開校される200年も前の天正年間(1573—1591)藩主為信の時代に紙漉村にすでに修験弘田養徳が読書、習字を主として寺子屋を開いていた(日本教育史資料)という記録があり、又、貞昌寺を開山した爰禎上人(1651・慶安4年)をはじめとして、僧侶たちは信仰だけではなく学問的にも町人や百姓等にも感化を与えている。

安政年間(1772—1781)には、数件の私塾や寺子屋が見られ、先に述べたように藩校が開校されてからの文政・天保・弘化年代にはその数が増していったのである。⑪

弘前市教育史 23～24頁 弘前における私塾・寺子屋（日本教育史資料八所載による）

名 称	所在地	開業年	廃業年	教師数	生徒数	調査年	身 分	塾 生、 師 匠 名
教 正 堂	川 端 町	安永元年	明治5年	男女 15	男女 80 18	安政6年	士	田 中 民 助
正 倫 堂	相 良 町	安永3年	明治3年	男女 15	男女 80 30	文政5年	士	黒 滝 幸 藏
知新学舎	百 石 町	安永3年	文久5年	男 1	男女 83 17	天保13年	士	佐 野 仁 助
幼林学舎	森 町	寛政12年	明治8年	男 1	男女 60 20	文化6年	士	石 沢 貞 八
桃 園 堂	代 官 町	文政7年	天保14年	男 1	男女 54 6	天保11年	士	佐 藤 新 藏
松 堂	小 人 町	文政11年	安政6年	男 1	男 85	天保3年	士	神 関 弥
向 学 堂	五十石町	文政12年	明治5年	男 1	男女 87 4	天保2年	士	柴 田 栄 助
	東 長 町	文政12年	文久元年	男 1	男女 139 37	弘化3年	筆 工	熊 井 三四郎
	小 人 町	天保5年	文久2年	男 2	男 50	文久元年	士	岩 田 平 吉
	薬王院門前	天保9年	文久5年	男 1	男女 73 21	嘉永6年	神 官	桃 井 真 澄
寄 玉 堂	瓦ヶ町	天保12年	明治4年	男 2	男女 180 40	安政元年	士	工 藤 嘉右衛門
	新 町	弘化2年	明治6年	男 1	男女 83 19	嘉永2年	士	成 田 太 源
篤 敬 堂	和 徳 町	弘化2年	安政3年	男 1	男女 85 11	嘉永元年	士	毛 内 新 八
	袋 町	安政3年	明治8年	男 1	男女 62 15	明治5年	士	奈 良 広 理
幼 習 堂	茶 畑 町	安政4年		男 1	男女 70 15	安政5年	士	下 沢 門 弥
	若 党 町	安政6年	慶応3年	男 1	男女 65 15	文久元年	士	横 山 永 観
	代 官 町	文久2年	明治6年	男 1	男 115	明治3年	士	山 崎 忠之進
修 道 塾	徒 町	文久3年	明治4年	男 1	男女 30 10	慶応元年	士	三 浦 源 八郎
	茶 畑 町	慶応2年		男 5	男 100	慶応2年	士	兼 板 成 言
麗 沢 堂	馬 屋 町	慶応3年	明治9年	男 5	男 300	明治4年	士	工 藤 主 善
思 齊 堂	馬 屋 町	慶応3年	明治9年	男 5	男 300	明治4年	士	伊 藤 祐 之
桃李義塾	笹 森 町	明治3年		男 3	男 90	明治4年	士	伊 藤 祐 之
向 陽 館	上白銀町	明治5年	明治6年	男 5	男 110	明治5年	士	工 藤 主 善

この表から見ると安永年間（1772—1781）に開設された川端町の教正堂や相良町の正備堂、百石町の知新学舎には女子も収容されているが、その就学の割合は男子の4分の1から3分の1にしか満たないほど少なかった。これは庶民の女子に文字を習わせる必要がほとんど感じられなかったこと、さらにはお茶や活け花などの女性の嗜みとしての教養をわざわざ身につけさせる生活上のゆとりがなかったものと見受けられる。

2. 幕末から学制までの教育

幕末になって、藩政は規模を縮小しながらも蘭学を取り入れ、やがては英学も必要となつて、1869（明治2年）7月、城の東門外にあった津軽直記邸（現在文化センター、堀に面した角屋敷）に英学寮を開設した。¹⁹ 英学寮は藩の子弟の中から優秀な者約20名を選び、学費を給付して入学させた。この英学寮の開設の中心となつたのは、福沢諭吉の塾で修学し、英語の学力を身につけてきた藩士吉崎豊作である。彼は弘前で英語を学んだ最初の人物

といわれている。^⑭

1870（明治3）年、それまで城内で細々と続いていた「学問所」（藩校）は、自然消滅して、英学塾が拡充された。

1871（明治4）年、廃藩置県によって、藩校は県の管轄となり、学費はすべて私費となり、入学資格は広く一般に解放されることになった。旧藩主津軽承昭は旧藩主の私塾という形で学舎の存続をはかり、「漢学寮」を城内に移し、「英学寮」を東門の外においた。しかし、城址が政府の管轄になったので、二つの寮を統合して追手門外の最初の藩校の地に移し、「弘前漢英学校」が開設された。^⑮ところが、「漢学寮」は工藤他山の私塾「向陽塾」としてまもなく向い角（現在市役所角）に移転したが、やがてまた、藩校の伝統を継ぐ新しい時代にふさわしい学校を設立するために二つの寮は統合され、明治5年末に「東奥義塾」の創設となる。

Ⅱ. 学制発布後の津軽地方の教育

1. 東奥義塾

1872（明治5）年8月2日、学制の趣旨を宣言した「太政官布告」とともに「学制」を公布し、8月3日に頒布した。

太政官公布第二百十四号（被仰出書）

人々各自其身を立て其産を治め其業を昌にして以て其生を遂るのゆゑのものは他なし身を修め智を開き才芸を長するによるなり而て其身を修め智を開き才芸を長するは学にあらずれば能はず是れ学校の設あるゆゑにして日用常行言語書算を初め士官農商百工技芸及び法律政治天文医療等に至る迄凡人の営むところの事学あらざるはなし人能く其才のあるところに応じ勉勵して之に徒事ししかして後初て生を治め産を興し業を昌にするを得へしされば学問は身を立つるの財本ともいふべきものにして人たるもの誰か学はすして可ならんや夫の道路に迷ひ飢餓に陥り家を破り身を喪うの徒の如きは畢竟不学よりしてかかる過ちを生ずるなり従来学校の設ありてより年歴ること久しといへとも或は其道を得ざるよりして其方向を誤り学問は士人以上の事とし農工商及び婦女子に至っては之を度外におき学問の何物たるを弁せず又士人以上の稀に学ぶものも動もすれば國家の爲にす唱へ身を立るの基たるを知らずして或は詞章記誦の末に趨り空理虚

談の途に陥り其論高尙に似たりといへども之を身に行ひ事に施すこと能ざるも少からず是すなわち沿襲の習弊にして文明普ねからず才芸の長せしめて貧乏破産喪家の徒多きゆゑなり是故に人たるものは学はすんはあるへからず之を学ふには宜しく其旨を誤るへからず之に依て今般文部省に於て学制を定め追々教則をも改正し布告に及ぶべきにつき自今以後一般の人民（華士族農工商及婦女子）必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す人の父兄たるもの宜しく此意を体認し其愛育の情を厚くし其子弟をして必ず学に従事せしめざるへからざるものなり（高上の学に至りては其人の機能に任すといへとも幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしめざるものは其父兄の越度たるべき事）

但從來沿襲の弊は士人以上の事とし國家の爲にす唱ふるを以て学費及其衣食の用に至る迄多く官に依頼し之を給するに非されば学さる事と思ひ一生を自棄するもの少からず是皆惑へるの甚しきものなり自今以後此等の弊を改め一般の人民他事を抛ち自ら奮て必ず学に従事せしむべき様心得へき事

右之通被 仰出候条地方官＝於テ辺隅小民＝至ル迄不洩様便宜解釈ヲ加ヘ精細申論文部省規則ニ随ヒ学問普及致候様方法ヲ許可施行事

明治五年壬申七月

太政官^⑯

この「被仰出書」で先づ注意することは、四民平等の立場から、学制は全国民を対象としていること、すなわち「必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」に示される「国民皆学」の精神である。また「幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしめざるものは其の父兄の越度たるべきこと」と義務教育の徹底を計ろうとしたことである。

又、新政府の「在県施政順序」の中に「小学校ヲ設クル事」の一項があって、1871（明治4）年7月の文部省設置以来、東京、京都には若干の小学校が設置されたが、本県では初等教育のことは全く始めてのことで参考にすべきものがなかった。その内容の差もはげしかったので、菊池九郎^⑰はさまざまな研究工夫を凝らし、後日の公立学校のモデルのために、吉川泰次郎^⑱たちと協力して、準備をすすめた。旧藩主津軽承昭からは、かつての藩校の建物や施設のほか、金五千円の提供を得て、県を通じて設立願を出していた。1872（明治5）年11月27

日、文部省から開学許可があり、1873（明治6）年2月、東奥義塾が開校、英文科、漢学科のほかに小学科がおかれ、小学科の生徒は百余名が在席したが、公立学校が設置されるにあたって、10月には一番小学へ半数を送り、1月に二番小学校へ残りを送ったため同年12月小学科を廃止した。その後公立小学校の収容力と設備が貧弱であるということから1875（明治8）年1月再び小学校が置かれ、同年4月には小学科女子部が設置されて明治15年まで続けられた。

この東奥義塾の女子教育にあたったのは、士族の婦人たちであった。彼女たちはかつて寺子屋や私塾にかよい、男子生徒にまじって修学した人も中にはいるが、ほとんどは厳しい家庭教育の中で士族の女子として教育を受けたもの、あるいは独学によるものが多かった。その婦人たちの何人かは1875（明治8）年10月2日の弘前教会の設立にも本多庸一⁴⁹をたすけ、教会の支えにもなり、そこでキリスト教の理解とともに新しい生活への意識に目覚めたのである。

2. 菊池幾久子

1875（明治8）年に開設された東奥義塾の小学科女子部の委員長（教師）となった菊池幾久子は、1819（文政2）年12月、藩の重職にあった父奈良莊司の二女として生まれる。彼女については「護教通信・明治26年4月15日」に掲載された紹介（略伝）によると、父莊司は当時の執政と施政に関して意見を異にして正義を守ったために藩政に殉じたといわれる。そのため家禄を没収されたが、その時、幾久子14才、母と弟とともに苦労を重ね、その後、深浦奉行を勤めた菊池新太郎夫人となる。しかし三男二女の母となった幾久子は36才で夫と死別してしまう。さらに姑をかかえた家族の生活は幾久子の一身に負わされることになる。幾久子は武門士道の心得をもって男子をきびしく教育、さらには毎夜、子女を集めて赤穂四十七士伝を説き、又論語の要点をわかりやすい言葉で教え、三国志、大岡政談その他義烈忠孝の談話をするを日課とした。自分自身は織機の前、紡車のかたわらに数冊を備え学んだ。それは裁縫、炊事、そうじと家事一切を整然となした上でのことである。女子には学問は無用であり、礼節を修め、家政を守ることが女性のつとめであるとされた時勢にあって、幾久子は幼い時から文学、学問の必要性を悟り、これを学ぼうとしたがその機会がなかった。そのために彼女も少しも文字の書いているもの、あるいは紙をみつけては懐に入れ、寸暇を惜んで二字三字と暗記し、灰に書き、その意味や読み方は弟にたずねて覚えていったのである。初めは仮名つきの草子を読み、次々と記録等を読み経伝史書を解説す

るにいたったのである。まさに独学である。

1870（明治3）年旧藩主がそれぞれの士分に田地を分与して移住をすすめた時には、幾久子の息子たちはみな家を出ていたにもかかわらず、率先して決行、独力で東郡追子野木村に移住、世禄を奉還して自活するために近所の子女を集め塾を開いたのである。そして東奥義塾小学科に女子部が開設されると招かれて教師を勤めること7～8年、専ら女子の教育にあたったのである。

1877（明治10）年10月幾久子は59才の時ジョン・イング²⁰から洗礼を受け、聖書を読むことを好み、1888（明治21）年には弘前教会の婦人とともに矯風会²⁰を作り、その会長となり教会では婦人部会長、日曜学校の教員をして自ら地方における生活改善や風俗改良運動など女性としての模範をしめしたのである。

三人の息子のうち長男九郎は前述のように明治維新の際藩政に奔走、東奥義塾を創設し、りんご栽培の先覚者であり、地方新聞社を創立、郡長から県会議員となり、初代弘前市長、そして衆議院議員となった。二男三郎は兄に代わってりんご栽培の定着に貢献、弘前市会議員となる。三男軍之助はアメリカ留学中で志を中端にして早世している。幾久子は明治以降のこの地方の良妻賢母の鏡のような女性であった。彼女は1890（明治23）年長男九郎が衆議院議員に当選したのを機会に東京へ転居、1893（明治26）年3月18日自宅で永眠、75才であった。

3. 公立小学校の女子教育

1796（寛政8）年藩校稽古館が創設されてから東奥義塾に女子小学部ができるまで、庶民の子弟はもちろん女子の就学はみられなかったが、当時は家庭で読み書きを教えたにすぎなかった。それすらも一般的には機織り、裁縫をおろそかにするものとして好まれなかったのである。幕末、維新後になってようやく私塾や寺小屋に通学する女子がみられるようになったのである。そこでの教材は男女別で、女子には『媛短歌』『女今川歌』『女大学』等²⁰が用いられた。

1873（明治6）年2月東奥義塾に小学科が置かれ、同年10月最初の公立小学校として「一番小学（白銀小学、現朝陽小学校）」が開設され、翌年1月に「二番小学（和徳小学）」が開設され、4月には「亀甲小学」が開設された。

当時の教科はどのようなものがあつたのだろうか。教科書がなく、学制規定の教科を教えることはなかなかできなかったといわれるか、参考までに掲げると、次のような難解なものであった。

教科（下等小学）綴字、習字、単語、会話、読本、修身、国体、書画、文法、算術、養生

法、地学大意、窮理学大意、体操、唱歌（当分之を欠く）

（上等小学）下等に加へ、史学大意、幾何学大意、算術大意、博物大意、化学大意、生理学大意、土地の情况により、記簿法、図画、政体大意、外国語を加ふることを得

教科書（定まれるものなし）

単語図、連語図、小学読本、世界国尽、日本国尽、商業往来、西洋事情洋算例題、算比例、天変地異、究理図解、智慧の環、日本地理提要、地球説略、学問のすすめ、勸善訓蒙、博物新篇、格物入門和解、輿地誌略万国史略、化学訓蒙等

（朝陽百年史 117頁）

そして1874（明治7）年9月に「白銀小学」に初めて女子部が設けられた。「白銀女子部」と呼ばれ、弘前における公立学校女子就学の初めである。『朝陽百年史』の116頁には次のように記されている。

「九月下旬、当校に女子部を設く。之より先小学共未だ女子の入学者を見るに至らざりしが当校職員秋元九郎氏大いに女子教育の必要を唱へ奮て女子の就学を勧誘し、遂に十五六名の入学者を得て教授するに至れり。之を弘前公立学校女就学の始とす。（永山源之丞氏『弘前女子教育沿革の概要』に依る）

1875（明治8）年8月、弘前における女子のみの公立小学校が開校される。それは、元寺町森岡氏の旧宅（警察署・現桜大通り）の含英小学校で白銀小学の女子の一部（10才以上および5級以上のもの、つまり年長者と高学年）を移して開校されたもので、この時秋元九郎氏も一緒に転任する²⁸。

まだまだ女子には学問は必要がないという風潮の中、含英小学校で開設されたということは、先に述べた「被仰出書」の中の「幼童の子弟は男女の例く小学に従事せしめ」の精神を具体化したものといえるのではないだろうか。

含英小学校は特定の学区を持たず、弘前市の共同の広範囲の女子が就学する学校であったが、1878（明治11）年頃になると入学者が少なくなって、経営困難となり廃校寸前の状態におちいってしまったので、これを維持するために各学区から戸数に比例して、一戸あたり年4銭2厘5毛を拠出させて、かろうじて学校を維持することができ、各小学の女子は有無を言わず、含英女小学に転校させられた²⁹。「学制」の中に「女子小学ハ尋常小学教科ノ他に女子ノ手芸ヲ教フ」（第26条）と規定されて

いるので、下等小学の教科以外に手芸（主として裁縫）を教育した。

この含英女小学は1878（明治11）年1月、構内に青森県女子師範学校が設立されてその附属小学となり、明治18年5月女子師範学校の廃止とともに廃校となり、在学していた生徒たちは各小学に転校させられたのである。

1882（明治15）年にはすでに東奥義塾の小学科女子部が廃止された。この年、「朝陽小学」は「朝陽小学校」に、「和徳小学」は「和徳小学校」に改称する。それとともに今までの尋常科10級（10級は最低学年）から6級までを初等小学とし、5級から1級（1級は最高学年、現在と反対に学年が進むごとに級の数が少なくなる）までを中等小学というふうに編成を変えたのである。和徳小学校の場合、女生徒で初等小学科に編入したものは約90人、中等小学科に編入したものはきわめて少なかった。³⁰ この頃になってもまだまだ女子教育に対して無関心のものが多く、女子は就学後、1～2年をすませると学問はもう充分だとばかりに退学させてしまう父兄が多いのである。つまり女子は、ひととおり文字が読めて、そろばんができるとあとは学問は無用という社会人一般の意識であったのである。

4. 高屋徳子

1868（明治元）年12月5日、弘前藩士山田貞寅、きよ夫妻の長女として弘前に生まれた徳子は明治の教育をそのまま身につけ、そして活躍した女性である。その母きよは明治10年、本多みよ（本多庸一夫人）、菊地幾久子について女性としては三人目の受洗者であり、弘前教会の幹部の一人として本多庸一の伝道を助け、また古い習慣の「お歯黒」を率先してやめた「歯の白いオガサマ（夫人）」の一人であった。そのような母をもった徳子は9才の時に含英女小学に入学、東奥義塾小学科女子部、弘前女子師範学校に入り、日ごろ、耶蘇の子と友だちにいじめられることから、15才の春、函館遺愛女学校に転校する。遺愛女学校はその年の2月に創設されたものの生徒が容易に得られず、学校関係者は弘前に出張、信者の家庭を訪問し熱心に入学を勧誘した。先見の明のあった両親はこれ聞いて大いに喜び真先に応じた³¹ という。16才の12月すでに函館教会で牧師をしていた次兄山田寅之助³² より洗礼を受ける。23才の9月従姉妹の中野うめ子と唯二人遺愛女学校第二回卒業生となる。その頃の遺愛女学校は国語以外はすべて原書を用いて、英語で会話をしていたので十分に英語の実力を身につけた。彼女はおそらく弘前において英語を自由に話せる最初の女性だったと思われる。彼女は卒業後直に母校の助教となり、その後遺愛女学校の分校として発足した弘前女学校の教

師となった。26才の時、中郡船沢村出身で早稲田大学の前身である東京専門学校政治科を卒業して帰郷していた高谷貞次郎に嫁ぐ、貞次郎はやがて津軽銀行頭取として地方財界人の一人として活躍し、徳子自身は弘前基督教婦人矯風会の二代目会長として活躍する。45才の時一人娘初恵を青山学院在学中に失なう。46才の時には日本赤十字社の正社員となり、同時に日本赤十字社篤志看護婦人会に入会、7年間同会の評議員として活躍。58才（大正14年）2月、弘前女学校の理事会が組織され、時には理事となる。その年7月夫貞次郎を失なう。その後ますます奉仕活動に身を挺し、1930（昭和5）年3月9日、61才で亡くなる。その遺言によって寄附された金額、夫を記念しての寄附等々、その寄附の総額は今日の金額に見積もると億を超える巨額にのぼるものであったといわれる。

高谷徳子については1930（昭和5）年3月12日弘前教員新内岩太郎が記した追悼文^⑧によったが、新内は高谷徳子の人柄について惜しめない称賛の言葉を綴っている。

「刀自は容姿端正中肉小柄の人、頭脳明晰にて理智に勝れ、茶の湯活花音楽等の趣味を有し常に清潔を尚び室内の装飾より庭園の洒掃に至るまで塾然として一絲乱れざるものあり、弁舌は敢て流暢といふにあらざれども克く人を見て説法底才幹あり、如何なる種類の老若男女に対して人を外らさぬ社交家でありました。夫君は素より理財に長し己に巨萬の富を有し輪奐たる門戸風流なる木石一見して富のその家を潤すを知れども、刀自内助の功大に與りて力ありと聞く所謂豊にして奢らず儉にして吝ならざる質素の生活で特に教育宗教に関しては多大の興味を有せられ……」高谷徳子はこの時代に生き、一人の女性として社会の形成者として持てる能力を発揮しその生き方を追求した女性であった。

Ⅲ. 学制発布後の都会の教育

津軽藩主津軽承昭が明治2年版籍を奉還し、弘前藩知事を任ぜられ、藩校稽古館の拡充を計ったが、1871（明治4）年4月28日弘前を発ち、5月17日に東京に移ったことによって、弘前城は兵部省の管轄となった。ここで津軽から都会へと目を転じ、都会での女子教育の状況はどうだったかを見ていきたい。

1869（明治2）年3月、官軍の提督として黒田清隆は、八隻の艦隊を率いて函館に到着、5月に幕府の脱走隊が占領していた函館を平定する。1870（明治3）年5月黒田清隆は北海道開拓次官に任命される。1871（明治4）年欧米視察の途中、駐米弁務使（公使）森有礼と女

子教育の必要性について論じる機会を得、黒田も森もアメリカ女性が教育があり、社会的地位が高いのを見て驚き、女子教育効果を認め、の意気統合して黒田が帰国の後、森との約束に基づいて、女子教育に関する意見書を政府に提出した。^⑨

「……故に今、幼稚の女子を選び、欧米の間に留学せしめんことを欲す」というのがその結論であった。黒田の意見は時の権力者、外務卿・岩倉具視の賛成を得て、経費は開拓使負担として、女子の志願者を募った。その応募者の中から5名が選ばれた。

東京府士族 吉益 正雄女 亮子

東京府士族 津田 仙女 梅子

（後に女子英学塾（現津田塾大学）長となる。）

東京府士族 上田 峻女 貞子

（上田敏の叔母、ミス・キダーの新潟時代の教え子）

静岡県士族 永井久太郎女 繁子

（瓜生外吉海軍大将夫人）

青森県士族 山川与七郎女 捨松

（陸軍大将大山巖公爵夫人）

彼女等は1871（明治4）年11月12日岩倉具視大使を正使とする欧米視察団の一行に託されて米国へ留学したのである。

1. 津田梅子

梅子は先に述べた菊池幾久子と同様に父親の影響を大いに受けた女性である。

梅子の父津田仙は下総佐倉藩の百二十石どりの家に生れたがのちに幕府の徒士津田家に養子に入った人である。1855（安政2）年米国総領事タウンゼント・ハリスが幕府に通商を強要した頃、津田仙は江戸に出て、苦心して英語を学んだ。1864（元治元）年12月3日二女梅子は生まれ、その三年後の1867（慶応3）年正月、仙は勘定吟味役小野友五郎の随員として米国ワシントンへ行った。仙はこの半年の旅からはかりしれない多くのものを学び、梅子の一生を方向づけることになったのである。^⑩

前述のごとく1871（明治4）年他の4人の少女と一緒に留学した梅子は1882（明治15）年11年ぶりに山川捨松とともに帰国するが日本語をすっかり忘れてしまっていた。梅子が米国で生活している間に、日本では「被仰出書」によって女子教育の方針が打ちだされ、促進がはかられていたが、当時の政府が強調したのは、女性個人の人格や人間性のための教育ではなく、日本の近代化の発展のための要員となるべき夫たちを守り、その子どもを育てるための良妻賢母の養成であった。であるから梅子が帰国した時にも未だ社会での女性の地位は上っておら

ず、家庭での女性地位もまだ認められておらず、女性が働く場も拓かれていなかったのである。そこで梅子は、かつて渡米の際に一緒だった伊藤博文の家に住み込み英語教師兼通訳を勤め、その後、1885（明治18）年9月から伊藤の紹介で華族女学校（学習院の女子部）の教授補となり、会話と作文を教えた。^⑩

1889（明治22）年華族学校に勤務して4年目、校長西村茂樹の好意によって再度留学の機会を得た。その時に梅子は女性のための高等教育の道が自分の進むべき道であることを悟り、その準備のために2年の約束の留学を3年にのびして、募金活動などを行った。

1892（明治25）年帰国し、華族女学校に復職、その時から1900（明治33）年に女子英学塾を創立するまでの8年間、彼女は華族女学校と女子高等師範学校で英語教師を続けたのである。その間彼女は日本女性に関するいくつかの論文（英文）を発表し、あるいは「万国婦人連合大会」の日本代表となるなど活躍している。

梅子が女子英学塾の開校式の式辞の中で、「真の教育には物質上の設備以上に教師の資格と熱心と、学生の研究が大切であること、真の教育は学生の個性に従って別々の扱いをしなければならぬから人数を限ること、英語塾の主な目的の一つは、将来英語教師の免許状をとり、たい学生のために確かな指導を与えたいこと^⑪」と述べ、さらに学生たちに向けて「英語の専門家になろうと骨折るにつけても、何事にも役立つ婦人となるに必要な、ほかの事柄を疎略にしてはなりません。円満な婦人、すなわち all-round woman となるように心がけなければなりません。……何事によらず、あまり目立たないように、いつもしとやかで、謙遜で、いんぎんであって頂きたい。こういう態度は決して研究の高い目的と衝突するものではありません。婦人らしい婦人であって、十分知識も得られましょうし、男子の学び得る程度の実力を養うこともできましょう。^⑫」梅子がこのような思いで創設した英語塾は多くの後継者に恵まれ、又梅子自身の活躍によって現在の津田塾大学にまで成長したのであるが、梅子は1929（昭和4）年8月16日鎌倉の別荘で亡くなった。

私はこの津田梅子の式辞を読んで、私たちは自分が女性であり、あくまでも謙遜でありいんぎんであることによって女性本来の使命を発見できると思うのである。戦後の教育はあまりにも男性を意識すぎ、男性に対抗してものごとを考えすぎたのではないだろうか。

2. 高杉幸子

弘前学院の百年史を編纂するために私たちは資料集めに奔走したが、身近なダンボールの中から次々と貴重な資料が現われた。その中の若葉幼稚園の入園願書の中に

明治37年4月18日付高杉英男、保護者の欄には高杉幸子とあった。高杉英男先生は弘前学院の第20代院長・校長である。高杉幸子と星野こう初めのうちはどうしても結びつかなかったが、ミス・キダーが創設したフェリスの歴史の中にフェリス和英女学校教頭星野光多という名がたびたび出てくるのに興味を持った。星野こうは星野光多の妹であった。そして高杉英男院長の父栄治郎氏と結婚して高杉幸子となったのである。

星野兄妹の母のいは1840（天保11）年2月10日西群馬郡渋川に生れ、1856（安政3）年星野宗七に嫁ぎ、明治初年に次男光多と3男又吉を伴って横浜に移住し、その後、西群馬教会（日本キリスト教団高崎教会）の牧師となった光多のすすめで、1884（明治17）年3月横浜市住吉町教会（指路教会）で毛利官治牧師より受洗。その年事業に失敗した夫宗七とともに郷里沼田に帰ったが、逆境の中にも限りない神の恵みがあるのを知ったといは信仰に燃え、信徒伝道に励みその影響で一族80有余人がキリスト教信者になった^⑬という。

このように信仰深い母の長女としてこうは1872（明治5）年8月に誕生、明治15年、兄光多のすすめでフェリス女学校に入る。10才であった。

1882（明治15）年のフェリスは、ミス・キダー（ローゼイ・ミラー夫人）に変わって31才の青年宣教師、ユージン・S・ブース^⑭が校長として就任、学則の整備をし、その規則書が作成、全国配布された。それには学科課程が整備・明文化され修業年限も定められた。さらにその中には女子教育の目的とフェリス教育の関連がもらわれている。^⑮

「女子教育ハ室家ノ和楽ヲ進ムルニ於テ大ニ力アリ蓋シ教育ヲ蒙リタル婦女ハ其家ノ男子ニ伴ナフニ當リテハ則チ好述良伴トナレバナリ……」第二に「女子教育ハ清潔高風ノ社会ニ欠ク可ラザル一事ナリ如何トナレバ世上何レノ邦ヲ論ゼズ女子教育ノ行ハレザル地ニ於テハ其社会ノ状態必ズ卑陋ナレバナリ……是ノ如キ地ニ在テハ男女ヲ合スルニ高尚ノ目的ナケレバナリ」第三に「女子教育ハ又国ノ福ナリ……子女薰陶ハ母親ノ最モ主ル所ナリ然レバ則チ之レガ責任タル重キ者ニ非ズヤ^⑯」

家庭において男子の良き伴侶になるために教養が必要であり、教育のレベルが男女の関係、社会の品位を決定し、将来国家を担う子女の教育を司る母親の責任を強調し女子の教育を説いている。

こうして学則が定められ、すでに全課程を修了したとみなされる者には卒業試験が行なわれ、これに合格して正式に第一回の卒業生となったのが、若松賤子（本名、大川かし子）『小公子』の翻訳者である。

フェリスに入ったこうは、先輩の長谷川みね（星野光

多夫人)と仲良くなり海岸教会に通い、1885(明治17)年11月9日みねと共に稲垣信牧師より受洗。この年、先に述べたように父宗七の星野商店は商運なく財のすべてを失って、郷里に引き上げてしまったので、こうはみねと同じフェリスの寮に入り起居をともにした。当時は生徒が少なかったため、みねより3才年下のこうだったが同級生のような間柄となった。^⑧ みねとこうは本科を卒業後、さらに進学。みねが1889(明治22)年、こうは翌1890(23)年それぞれ7月に高等科を卒業。母校の教師となる。みね20才、こう18才の若さであった。光多は1899(明治32)年10月までの8年余、こうは1896(明治29)年3月までの6年弱、フェリスの教師を勤める。こうは1896(明治29)年5月21日、当時東奥義塾教諭だった高杉栄次郎^⑨と弘前で結婚、1897(明治30)年9月に夫栄次郎が青山学院教授として東京に移ると同時にこうは青山女学校奉職1年6ヶ月、その間「明治30年中等学校英語科教員検定試験=合格シ教員免許状ヲ附与サル、コレ女子ニテハ当時第二番目ノ合格ナリキ^⑩」と優秀な教師であった。その後、明治32年4月夫栄次郎が札幌農学校に招かれ札幌に移り、その年二男として英男先生が生れたのであるが、栄次郎が再度渡米中の明治36年、こうと子供たちは夫の郷里弘前に帰り、こうはミッションスクール弘前女学校(現弘前学院聖愛高等学校)でミセス・アレキサンダー校長のもとで教頭として3年半、女子教育のために尽力する。1938(昭和13)年1月急性狭心症のため札幌にて永眠、67才であった。

この妹あいはい1884(明治17)年9月12日生れ、1897(明治30)年1月12才のとき小崎弘道牧師より郷里の自宅で受洗。1899(明治32)年4月フェリスに入学、光多の家から通学する。6ヶ月後の10月光多が両国教会牧師となったため、寮に入り、フェリス時代の5年間は海岸教会に通った。1904(明治37)年9月より女子英学塾に学び、米国プリンマー・カレッジに留学、母校の教壇に立ち、のちに津田梅子の後を継いで、津田塾大学の塾長として25年間女子教育に励んだのである。

教育の機会均等が明確にされた明治初期、津田梅子が留学という日本で最初の外国で学問するという機会に恵まれたが、結局は女子には学問は必要がないという一般的な風潮には勝てず、帰国後の梅子にはそれにふさわしい仕事が与えられなかった。そして自らが理想とする教育機関を創設しなければその道が開かれなかったのである。が一方高杉幸子(星野こう)は時代の波に乗ったことも一つの理由であるが、兄星野光多という強い支えがあり、周囲の人々に恵まれ(兄嫁となった長谷川みね、フェリスの校長ブースなど)横浜にいながらにして当時

の最高の教育を受け、卒業後の就職も母校であり、転居のたびに仕事を与えられた。家庭的にも恵まれ、高杉幸子は当時の女性としては最も充実した生き方をしたのではないかと思うのである。

Ⅳ．津軽地方の女子のための教育機関

小学校の数が徐々に増し、その中に就学する女子の数もふえてきて、その子どもたちのための女子の教員が必要となり、女子のための高等教育機関、ようするに女子の教員を養成するための機関(学校)の設置が早急に必要となってきた。

1877(明治10)年12月5日青森県令山田秀典は、第379号をもって次のような通達を出している。

「今般弘前へ仮ニ女子師範学校ヲ設置シ学則ノ儀ハ当分別冊之通定候条此旨相達候事^⑪」

この場合、女子師範はあくまでも仮に設けられるものであることを強調し、学費一切は自費であること、40名だけを募集することとして、1878(明治11)年1月、弘前市元寺町にあった含英小学校に設置されることになった。これは当時としては全国的にも早い時期の開設である。^⑫ そして校長は金沢出身で東京師範学校を卒業した小川品子である。この女子師範学校は修業期間が2年で予科の教育機関であった。40名の募集にかかわらず、24名が入学、そのうち2級から1級に進むものはその半数にも満たなかったのである。これは女子の就学の低さを如実にあらわしている。

1880(明治13)年度の学事年報には「女子師範生徒ハ35人、卒業スルモノ11人ニシテ本校ニ在勤スルモノ7人他其ハ各郡ニ派出セシム7月中弘前含英小学校ヲ廃シテ本校ノ附属ト為ス^⑬」とある。

ようやく女子師範学校が設置されたものの明治13年5月25日に開かれた青森県会では「女子の教育は小学校だけでよい^⑭」という意見が出たり、女子師範学校の廃止論がでて、一般社会ではあまり歓迎されなかったようである。なぜならば、入学しても順調に進級することができなかったり、さらには県の財政難も影響してきて、ついに1884(明治17)年11月には弘前師範分校が廃止され、1885(明治18)年5月8日には青森県会の決議によって女子師範学校の廃止も決定してしまったのである。その後、1911(明治44)年4月に再び女子師範学校が設置されるまで、青森県の女子教員養成の道は途絶えてしまったのである。

この就学率の低下は、明治初期には士族の子女たちも目覚め進学を志望する者が多かったが、士族の生活が逼

迫するにしたがって、学びたくても学べない者が多くなったことと、一方では町家の子女の向学への意識が今ひとつ盛り上がらなかったことによるものと思われる。

このような弘前の教育状況の中にあっても、士族の子女の中には向学心の盛んなもの、あるいは教育に対して熱心な親たちがいて、海を渡って函館の遺愛女学校に学ぶものが出てきたのである。

そこで1886(明治19年)長谷川誠三や本多庸一等の働きかけによって、函館の遺愛女学校(当時は米徳女学校)の分校の形で女学校が創設されることになる。この女学校、すなわち現在の弘前学院の前身である弘前女学校は県立の高等女学校が弘前に設置されるまで弘前における唯一の女子教育の機関となったのである。(1987.10.3)

引用文献・参考文献

- 前野喜代治著
『みちのく双書第四集青森縣教育史 上』
青森県文化財保護協会 昭和32年版
- 弘前市編纂委員編
『弘前市史 藩政篇』弘前市 昭和38年版
『弘前市史 明治・大正』弘前市
- 『弘前市教育史 上巻』 昭和50年版
- 千葉寿夫著『和徳小学校 沿革史 明治篇』
弘前市立和徳小学校 昭和39年版
- 千葉寿夫著『和徳小学校沿革史』
和徳小学校創立百周年記念事業協賛会 昭和50年版
- 朝陽百周年編纂委員会
『朝陽百年史』
朝陽小百周年記念事業協賛会 昭和49年版
- 校史編纂委員会
『八十年史一青森県立弘前中央高等学校』
創立八十周年記念行事実行委員会 昭和55年版
- 七十五周年史編集委員編
『遺愛七十五周年史』遺愛女子高等学校 昭和35年版
- 青山学院編『青山九十年史』青山学院 昭和40年版
- フェリス女学院100年編集委員編
『フェリス女学院100年史』フェリス女学院
1970年版
- フェリス女学院110年小史編集委員編
『フェリス女学院110年小史』フェリス女学院
1985年版
- 『弘前女学校歴史』弘前女学校 1927年版
- 八十周年記念誌編集委員会
『弘前学院創立八十周年記念小誌』弘前学院
1967年版
- 弘前学院九十年史編集委員会
『弘前学院九十年史』弘前学院 1976年版
- 弘前図書館編
『郷土の先人を語る 2
菊池九郎』弘前市立図書館 昭和43年版
『郷土の先人を語る 6
本多庸一』弘前市立図書館 昭和45年版
- 船水清著
『ここに人ありき 3

- 柴田やす』陸奥新報社 昭和45年版
- 大木英二著『弘前教会百年小史』
弘前教会 1983年版
- 円地文子編
『人物日本の女性史 第12巻
教育・文学の黎明』集英社 昭和53年版
- 女性学研究会編『講座 女性学 1 女のイメージ』
『講座女性学 2 女たちのいま』
『講座女性学 3 女は世界をかえる』
『講座女性学 4 女の日で見る』
勁草書房 1984年版
- ジェイン ローランド マーティン著
村井実監訳
『女性にとって教育とはなんであったか』
一教育思想家たちの会話一
東洋館出版社 1987年版
- ポール トゥルニエ著 山口實訳
『女性であること』ヨルダン社 1981年版
- 新聞
○陸奥新報「津軽の近代化とキリスト教」
相沢文蔵著
昭和60年9月21日 No. 46
昭和61年11月22日 No. 100
- 朝日新聞
昭和50年10月24日
昭和62年10月26日
昭和62年10月29日
- 雑誌
○フェリス女学院資料室「あゆみ」
1983. No. 11, No. 12

注

- ① 昭和62年10月26日 朝日新聞。
- ② イワン・リーチ氏(米・文明批評家・歴史家)
昭和60年10月24日 朝日新聞。
- ③ 「リープル・ド・ファミ」
東京都渋谷区4-28-5 東都レジデンス 410号
- ④ 加野芳正著「大学教員市場の変動一女性研究者を中心」
香川大学教育学部研究報告第57号(1980年)
- ⑤ 塩田庄衛他
「婦人研究者のライフサイクル調査研究を中心に」
(1964)
- ⑥ 朝日新聞 昭和62年10月29日
- ⑦ 弘前市史 藩政編 448頁。
- ⑧ 弘前市史 藩政編 449頁。
- ⑨ 1669(寛文9)年蝦夷の地で「アイヌ」の暴動が起き、その鎮圧に手こずっていた松前藩を支援のため、津軽藩から家老杉山八衛以下500名を派遣した。これが津軽藩の渡海出兵の最初である。これ以来津軽藩は北辺警備の重要な任務を担われ、負担は大きかった。
—陸奥新報1987.10.31. 古文書こぼれ話30—
- ⑩ 弘前市史 藩政編 490頁。
- ⑪ 弘前市教育史 上巻 11頁。
- ⑫ 弘前市教育史 20頁。
- ⑬ 弘前市教育史 93頁。
- ⑭ ⑬と同じ。
- ⑮ 八十年史県立弘前中央高校 11頁。

- ⑩ 弘前市教育史 166～167頁。
- ⑪ 1847（弘化4）年～1926（大正15）年。
1869（明治2）年7月慶応義塾に入学、翌3年藩命により鹿児島へ留学、そこで多くの人たちと交友関係を結び、広い見識をそなえて帰郷。
（郷土の先人を語る(2) 菊池九郎）
- ⑫ 慶応義塾から派遣され、藩学の消滅後もひとり残って英学の指導にあたっていた。
（弘前市教育史 上巻 106頁）
- ⑬ 1848（嘉永元）年弘前に生れ、1912（明治45）年63才で亡くなる。藩校稽古館で学ぶ。1870（明治3）年横浜に赴き、S.R.ブラウン塾で英語を学ぶ。東奥義塾塾長となる。青山学院院長として17年間勤務。
（郷土の先人を語る「本多庸一」）
- ⑭ John Ing (1840—1920)
アメリカ・メソヂスト監督教会牧師。インディアナ州のアスベリー大学を卒業後、陸軍に入り騎兵少佐となる。その後キリスト教伝道を志し、宣教師として中国に渡る。中国伝道からの帰国途中日本に立ち寄り（1874）。菊池九郎に迎えられ、弘前の東奥義塾の教師となり、本多庸一と協力して、伝道し、弘前教会発展の基礎を築いた（1875）。（東奥義塾再建十年史（1931）による）。
- ⑮ 1886（明治19）年、米国から禁酒宣伝の遊説員が来日したのを機に矢島かじ子が会長となって「日本基督教婦人矯風会」が組織される。
- ⑯ 八十年史県立弘前中央高校 45頁。
- ⑰ 朝陽百年史 117頁。
- ⑱ 和徳小学校沿革史 明治篇 78頁。
- ⑲ ⑳と同じ 105頁。
- ㉑ 「教界時報」昭和5年5月16日 第2001号
- ㉒ 山田寅之助（1861・文久元年～1928・昭和3年）
弘前藩士の出。東奥義塾でイングと本多庸一の教えを受ける。明治13年、神学校入学、卒業して各地を伝道、明治22年から青山学院神学部教授。
（相沢文蔵著「津軽の近代化とキリスト教 No.46 陸奥新報 昭和60年9月21日）
- ㉓ ㉒と同じ。
- ㉔ 遺愛七十五年史 15頁。
- ㉕ 教育・文学の黎明「津田梅子」15頁。
- ㉖ ㉓と同じ 28頁。
- ㉗ ㉓と同じ 36頁。
- ㉘ ㉓と同じ 36頁。
- ㉙ フェリス女学院資料室「あゆみ」1983 12号
星野達雄著「星野光多とその一族」
- ㉚ Eugene S. Booth, 1859—1931
ラトガーズ大学でバチュラー及びマスター・オブ・アーツの学位をうけ、さらにニューブランズウィック神学校で学んで卒業と同時に来日、土地、校舎の拡大は勿論、41年間にわたって夫人とともにフェリスの育成に尽した。
- ㉛ 「フェリス女学院 110年小史」32頁。
- ㉜ ㉛と同じ 36～37頁。
- ㉝ 「あゆみ」1983年11号
星野達雄著「星野光多とその一族（1）」
- ㉞ 高杉栄次郎 慶応3年弘前生れ、19才の時東奥義塾を卒業後渡米、デポー大学に学び卒業後ボストン大学、ハーバード大学で苦学を続け帰国後、東奥義塾の教諭となる。
- ㉟ ㉞と同じ。
- ㊱ 弘前市教育史 上巻 398頁。
- ㊲ ㊱と同じ 471頁。
- ㊳ ㊱と同じ 400頁。
- ㊴ ㊱と同じ 407頁。